

## (1)基本情報

1. 名称	[和] 富岡製糸場と絹産業遺産群 [英] Tomioka Silk Mill and Related Sites
2. 所在	群馬県富岡市、伊勢崎市、藤岡市、下仁田町
3. 面積	[遺産地] 7.20 ha [緩衝地域] 415ha
4. 登録年	[暫定一覧] 2007年 [登録推薦] 2013年1月 [世界遺産登録] 2014年6月
4. 登録区分	文化遺産
5. 遺産種別	遺跡
6. 登録基準	(ii)ある期間を通じてまたはある文化圏において、建築、技術、記念碑的芸術、都市計画、景観デザインの発展に関し、人類の価値の重要な交流を示すもの (iv)人類の歴史上重要な時代を例証する建築様式、建築物群、技術の集積または景観の優れた例

## (2)遺産の概要及び世界遺産としての価値評価

遺産の概要	富岡製糸場の歴史は明治時代初期にさかのぼる。ふたつの教育施設、蚕種（蚕の卵）冷蔵施設と共に、製糸場は伝統的生糸生産国であった日本が、最高水準の大量生産技術の導入を熱望していたことを示す証拠である。日本政府は群馬県に生糸の一貫生産体制を確立すべく、フランスから機械と専門技術を輸入した。その取り組みにおいて、蚕種の生産、養蚕、繰糸と機械紡績のための大規模な製糸場の建設が行われた。その結果、富岡モデル工場とそれに付属する施設は、19世紀末の四半世紀に、養蚕と日本の絹産業の刷新において決定的な役割を果たし、日本が近代工業国の仲間入りをするために鍵となる要素となった。
価値基準	(ii) 富岡製糸場は、産業としての製糸技術をフランスから日本に、早い時期に、完全に移転することに成功したことを示している。地元での長年の養蚕の伝統を背景として行われたこの技術移転は、養蚕の伝統自体を抜本的に刷新した。この結果富岡は、技術改良の拠点となり、20世紀初頭の世界の生糸市場における日本の役割を証するモデルとなった。このことは、世界的に共有される養蚕法が、早い時期に現れたことの証拠となった。 (iv) 富岡製糸場と絹産業遺産群は、生糸の大量生産のための一貫した集合体の優れた見本である。設計段階から工場を大規模なものにしたことと、西洋の再良の技術を計画的に採用したことは、日本と極東に産業の方法論が伝播する決定的な時期だったことを示している。19世紀後半の大きな建築物群は、和洋折衷という日本特有の産業建築様式の出現を示す卓越した事例である。

(出典：文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/>における当該遺産のページに付される「顕著な普遍的価値 (OUV) の言明」に係る PDF)